

# 「平和と愛」が筆跡…茨木のり子&金澤翔子の世界

6月12日は詩人・茨木のり子、書家・金澤翔子の誕生日。同日夕方六時半から八時半まで「茨木のり子&金澤翔子 パースデー記念イベント」を主催した（東京都北区、王子駅前「北とぴあ」ドームホール）。その趣旨は次のとおりである。

## クサビに似たふたりの存在

茨木のり子の筆跡（詩情）と、金澤翔子の筆跡（書風）は、社会や世間への転位にも似た刺激と感動を与えてくれている。しかし、

まだ小さな存在である。ふたりの筆跡を理解する人口密度を高め、夢について、いまの時代に対話するように多くの詩作を筆で遺した。金澤翔子は、その夢を書道

の筆で、ダウン症ながら全身で勢いよく記述しています。のり子と翔子の二人の誕生日は同じく6月12日。ふたりの筆跡から「平和と愛」について学ぶことを、その日の誕生記念日として開催します。』と母・勝の長女。第二次世界大戦

の終戦の年が19歳。学んだ薬学の道ではなく、天性や経験、そして出会いを表現し、のちに現代詩の場にはいな長女と呼ばれた。彼女の詩は、感性たつめたい若者のように呼応し、会場には度し難い。その情感が、今の時代さ！／／のけ者にされた少女は防

た。高度経済成長&60年安保の時期に茨木のり子もデモに出かけた。茨木のり子は「歳月」にこだわった。春夏秋冬、季節の変化もわった。大きな歳月は、時代の変化である。時代をどのようにとらえるか。作者ばかりでなく、読者自身も重ねて読み解きたい。

作品例：秋準備する、見えない配達人、ざらりと光るダイヤのよるな日、ジャン・ポール・サルトル、悪童たち、私が一番きれいだったとき、大学を出た奥さん、花の名、ゆりうりえんれんの物語、四月のうた、兄弟、古潭、木の実、四海

波静、足跡、食卓に珈琲の匂い流れ、さくら、時代おくれ、マザー！テレサの瞳、球を蹴る人、等々。今回の公演で重視したのは、つ

ぎの「対話」である。ネーブルの樹の下にたえずいると／／白い花々が烈しく匂い／／獅子座の首星がおおきくたい／／つめたい若者のように呼応して／／地と天のふしぎな意志の交

空頭巾をかぶっていた隣村のサレンが／／まだなっていた／／あれほど深い妬みはそののちも訪れない／／対話の習性はあの夜幕を

才能が開花した。二十歳に銀座で個展。大反響となり、書道家・金澤翔子が誕生した。今日まで、その筆遣い、筆跡のインパクトは激しい。カスレと勢い。白黒の紙と墨と筆のアート。翔子の姿はその時

の時にあるが、作品はその時の時空情を残し伝えている。

作品例：飛翔、共に生きる、華厳、雨二毛負ケズ、平清盛、慈愛、愛、無、春、桜、風、星、心、笑、庄内弁で『わたしが一番きれいだったとき』を朗読表現した。

第2部で、和琴奏者&ギター奏者の高谷秀司は、へ相聞歌による対話として、茨木のり子を会場

内へ現存在させ演出表現した。小川紗綾佳は、返しの役のほか、ピアノ伴奏を行った。

第3部は、6月2日から封切られた金澤翔子の映画「共に生きる」について筆者が紹介解説した。

共感の時空間であるから重要視される。

誕生月である6月、とくに1960年6月、は、34歳であったが、自身の学生時代を重ね切った。

1950年山形生まれ。東京都立大院卒。元千葉大学院工学研究科准教授（金属疲労専攻）。金属疲労の研究のほか、他分野のテーマの研究開発に努めるとともに日本各地の地域おこし活動に従事する。ローカル鉄道と地元の酒蔵のコラボで地域再生を図る地酒「鐵の道」の製造・販売を企画（すでに10件を超える銘柄を送り出している。一般社団法人洗楓座代表。一般財団法人「エコミュージ

アムいすみ」代表。

解き、トークと朗読、さらにシャノンソんで好演した。朗読家の松島邦は、『六月』のほか、出身地の庄内弁で『わたしが一番きれいだったとき』を朗読表現した。



茨木のり子



金澤翔子の世界



共に生きる

## 地元力発見！！

佐藤建吉 「洗楓座」代表

自身の学生時代を重ね切った。

自身の学生時代を重ね切った。



自身の学生時代を重ね切った。